

中国明代民歌の中の「物」と「恋」：「掛枝児」を中心として

朴, 春麗
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/4494468>

出版情報：比較社会文化研究. 6, pp.1-8, 1999-10. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：

中国明代民歌の中の「物」と「恋」

—「掛枝兒」を中心として—

朴 春 麗

はじめに

中国の明代には、民歌が大変はやった。明代民歌には、主に都会や郷鎮ではやった俗曲と農村ではやった山歌とがある。俗曲は、小令、小調、小曲、時調とも呼ばれるが、明代には様々な俗曲が流行した。例えば、「鎖南枝」、「擘破玉」、「掛枝兒」、「傍粧台」、「駐雲飛」、「桐城歌」、「山坡羊」、「鬧五更」、「寄生草」、「羅江怨」、「哭皇天」、「乾荷葉」、「粉紅蓮」、「銀絞絲」などがそれである。その中で最も有名なものは、「掛枝兒」である。明末の文人馮夢龍は、中国史上初の民間文学の個人専集である『童痴一弄・掛枝兒』を編集した。一方、山歌はもともと、江南地域の農村で流行した抒情小歌であったが、明代になって都会の発展とともに、農村から大量の人口が都会へ流入するにつれて、変容し、俗曲とともに都会でも発展した。山歌は、蘇州を中心として、主に呉語を使用する地域で流行したので、「呉歌」もしくは「呉中山歌」とも言う。

掛枝兒や山歌のような民歌がいかに猛烈な勢いで流行したかを、当時の文人たちの言葉によって窺うことにしよう⁽¹⁾。

例えば、明末の顧啓元は『客座贅語』巻九「俚曲」において、

里弄の童孺の喜びて聞く所のもの、^{むかし}旧は惟だ「傍粧台」、「駐雲飛」、「耍孩兒」有り……後には又た「桐城歌」、「掛枝兒」、「乾荷葉」、「打棗竿」等有り。

といい、また、范濂は『雲間拋目鈔』巻二「記風俗」において、

歌謡詞曲は古よりこれ有り。惟だ吾が松（江）、近年特に甚し。……里中の悪少、燕居には必ず「銀絞糸」、「乾荷葉」、「打棗竿」を群唱す。^{しかる}竟に此の風何こより起これるかを知らざるなり。

といている。「打棗竿」は、「掛枝兒」の異名である。これについては、『明清民歌時調集』⁽²⁾の関徳棟「掛枝兒」序と鹿憶鹿氏の『馮夢龍所掛民歌研究』⁽³⁾の中で、既に論証されている。「掛枝兒」は、「掛真兒」とも書き、「打棗竿」は「打草竿」、「打草干」、「打草乾」とも書く。

また、明末の凌濛初は、『南音三籟』の巻首に付された

「譚曲雜割」の中で、当時の詞曲について語るとき、

今の時行曲に、一語の唱本「山坡羊」、「刮地風」、「打棗竿」、「呉歌」等の中の一妙句を求むるも、必ず無き所なり。

と民歌を高く評価し、また、賀貽孫は『詩筏』の中で

近日の「呉中山歌」・「掛枝兒」は、語、風謡に近く、理無けれども情有り。近日の真詩の一線の存する所なり。と述べている。また、袁宏道は『錦帆集』巻二「叙小修詩」の中で、

吾謂らく今の詩文は伝わらずと。その万一伝わるものは、或いは今の閭閻の婦人孺子の唱う所の「擘破玉」、「打草竿」の類ならん。猶お是れ無聞無識の真人の作る所なるが、故に真声多し。顰を漢魏に效わず、歩を盛唐に学ばずして、性に任せて発するも、尚お能く人の喜怒哀楽嗜好情欲に通ず。是れ喜ぶべきなり。……大概情至れるの語は、自ら能く人を感じしむ。是れを真詩と謂い、伝うべきなり。……

といい、兄袁宗道への手紙（『袁中郎全集』巻二十二「與伯修」）では、

近来詩学大いに進み、詩集大いに饒かに、詩腸大いに寛く、詩眼大いに闊し。世人は詩を以て詩と為し、未だ詩を作るの苦を免れず。弟は「打草竿」、「擘破玉」を以て詩と為す。故に楽しみ足るなり。

と述べている。また、卓珂月（名は人月、杭州の人）は、

我が明は、詩は唐に譲り、詞は宋に譲り、曲は元に譲る。^{こいねがけ}庶幾くは呉歌、掛枝兒、羅江怨、打草竿、銀絞糸の類、我が明の一絶為らんことを。

と述べている（陳宏緒の『寒夜録』巻上）。

以上、多くの文人の言葉からわかるように、これらの民歌は中国明代に一世を風靡したものである。しかし、これらの民歌についての研究は、まだ十分に行われているとはいえない。従って、小論では、「掛枝兒」と「山歌」を主な考察対象として、明代民歌に現れた「物」と「恋」の関係について、いささか弊見を述べたいと思う。ただし、紙幅の都合により、「山歌」については、その概要のみを簡単に補記に記すことにする。

1. 掛枝児とは

「掛枝児」という俗曲は、中国明代の万暦（1573～1620）年間から天啓・崇禎時代（1621～1644）にかけて大変流行したが、その余勢は清初まで続いた。地方によっては、乾隆（1736～1795）末頃までも行われていた⁽⁴⁾。既に述べたように、掛枝児は主に都会や郷鎮で流行した都市俗曲である。「掛枝児」という名前の由来を調べるすべはないが、内容はほとんどが男女の色恋に関したものであり、使われている言葉は白話である。

王驥徳の『曲律』巻三「雑論上」には

北人は尚お天巧を余せり。今伝わる所の打棗竿の諸小曲、妙にして神品に入るものあり。南人^{はなび}苦だこれを学ぶも、決して入る能わず。蓋し北の打棗竿と呉人の山歌とは、文士たるを必せず、皆な北里の侠、或いは閨閣の秀の、無意を以てこれを得るなり。猶お詩の鄭衛の諸風の大雅を修める者は、反って作る能わざるがごときなり。とあり、同じ『曲律』巻四「雑論下」には

小曲掛枝児即ち打棗竿は、是れ北人の長技にして、南人は毎に及ぶこと能わず。昨日、毛允遂我に呉中新刻一帙を貽る。中の噴嚏、枕頭等の曲の如きは、皆な呉人の擬する所なり。即え韻に不しく出入あるも、然れども措意俊妙にして、北人と雖も之に加えるものなし。故に人情の原相遠からざるを知るなり。

とあるように、掛枝児は北方から南方へ伝わったものであり、妓館（“北里の侠” — 妓女）や民間（“閨閣の秀” — 普通の女性）で行われていた。実際、馮夢龍の『童痴一弄・掛枝児』の中には、収集源が妓女と明記されているものがいくつかあり、内容も妓女・妓館を題材としたものがかなりある⁽⁵⁾。妓館が、掛枝児の主要なやり場の一つであったことが推定される。

掛枝児のもう一つ主要なやり場と想定されるのは、“茶楼酒肆”である。“茶楼”は、2階建ての茶屋を指すが、簡易な舞台が設置されており、芸人が舞台上で芸をするのを鑑賞しながら、お茶を飲む所である。“酒肆”は、お酒を飲む所であるが、個室があり、客は芸人や妓女などを呼んで、お酒を注がせたり、歌を歌わせたりすることができた。客が芸人や妓女を呼ぶことを、“叫局”といい、芸人や妓女がそれに応えて来ることを、“応局”もしくは“赶条子”というが、“応局”する芸人及び妓女は、必ず小調つまり俗曲が歌えなければならなかった⁽⁶⁾。だから、このような所でも、掛枝児のような俗曲は、芸人や妓女によって歌われたのであろう。

しかし、沈徳符の『万暦野獲編』巻二十五「時尚小令」の条には、

比年以来、又た打草竿・掛枝児の二曲あり、その腔調

約略相似たり。則ち南北を問わず、男女を問わず、老幼良賤を問わず、人々これを習い、亦た人々喜びてこれを聴き、以て刊布の帙を成すに至り、世を挙げて伝頌し、人の心腑に沁む。その譜何くより来れるかを知らず、真に駭歎すべし。

とあるから、掛枝児は、上のような特定の場所だけでなく、民間の至る所で広くはやっていたことが分かる。特に市井で流行していたと思われる。掛枝児が全く農村には伝わらなかったとは思えないが、都会に伝わった農村起源の山歌が都会に定着して都市俗曲とともに発展したように、農村に伝わった掛枝児が農村に定着して農村の山歌とともに発展したとは思いがたい。それについては、今のところ、掛枝児の曲調・歌詞の内容・形式・表現形態などから推測するほかないが、山歌に較べて、掛枝児は、歌詞の形式・表現形態ともに、都会の洗練さといささか“雅”なる性質を持つため、農村の人たちには合わなかったと思われるからである。

掛枝児の形式を見れば、白話でありながら、韻を踏むものが多く、音律は、基本的に「八（上三下五）、八（上三下五）。七（上四下三）。五（上二下三）、五（上二下三）。九（上四下五）」であるが、内容・言葉・叙情の必要などによって、変えることができる。例えば、叙情の必要によって、最後の一句を二句に分け、その間に「也」という襯字を入れる場合が多い。

以上、掛枝児の広域流行及び形式などについて述べたが、掛枝児の猛烈な流行は、文人たちに大きい衝撃を与えた。多くの文人がその勢いに驚き、従来の文学にはなかった新鮮さを見出し、一部の文人たちは、真似て掛枝児を創作するまでに至る。そしていよいよ、馮夢龍のように、文字で記録し、専集を編む文人まで現れたのである。

2. 掛枝児の詠物対象としての「物」

馮夢龍の『童痴一弄・掛枝児』の構成は次のようになっている。

卷一私部	45首	卷二歎部	37首	卷三想部	48首
卷四別部	19首	卷五隙部	68首	卷六怨部	28首
卷七感部	30首	卷八詠部	92首	卷九虐部	21首
卷十雑部	31首				

他の巻と較べて、格別に量が多いのは巻八詠部であるが、この巻に収められているのは、全てが詠物掛枝児である。詠物は、掛枝児を特徴づける主要な表現形態である。勿論、詠物は、決して掛枝児独特の文学表現手段ではない。唐詩・宋詞の中にも、詠物は用いられている。ただし、掛枝児の

詠物は、唐詩・宋詞の詠物とは異なる特徴を持つ。

まず、詠物対象となる「物」が異なる。唐詩・宋詞の詠物対象は、あくまでも花・草・木・鳥・月・楽器・美人など、美的感覚を与えてくれるものに限られているが、掛枝児の詠物対象は、後述するように、実に様々な「物」が含まれている。美的感覚を与えてくれるものよりも、むしろ美的感覚を与えてくれない「物」が多いと言えよう。中でも特に多いのが日常生活用品である。

次に、詠物テーマが異なる。唐詩・宋詞の詠物テーマは、必ずしも男女の「恋」とは限らない。しかし、掛枝児の詠物テーマは、ほとんどが男女の「恋」である。

掛枝児においては、実に様々な「物」が男女の「恋」を表現する詠物対象となっているが、それを分類して見ると、

(1) 日常生活用品

扇子、頭巾、頭巾の紐、長靴、象牙櫛、櫛、鏡、歯ブラシ、耳搔き、針、ハサミ、布ボタン、枕、寝靴、纏足布、蚊帳の釣り手、錠、竹夫人、しびん、香炉、香筒（線香を入れておく筒）、提灯、ろうそく、（お粥などを焚く）器、小秤、天秤、分銅、黒つぼ、傘、引き臼、ふいごなど。

(2) 娯楽物

凧、蹴羽根、風船、爆竹、サイコロ、トランプ、囲碁、将棋、双六、雪獅子など。

(3) 楽器

簫、太鼓など。

(4) 文房具

筆など。

(5) 植物

花（“花”，“柳の花”，“花の名”，“花と蝶”），
実（“実”，“桃”，“かんらん”），
葉（“葉”，“蓮”），
根（“蓮根”），
茎（“甘蔗”），
種（“向日葵の種”）など。

(6) 食べ物

粽、（桃）、（かんらん）、（甘蔗）、（蓮根）、（向日葵の種）など。

(7) 鳥及び昆虫

雀、とんぼ、蚊など。

(8) その他

月、石獅子、舟、灯花（灯心の先にできるもえがすが花の形をしたもの）など。

一番多いのは日常生活用品である。中には、今日には既に姿を消してしまっていて、どういう物だったのか我々にはは

っきり分からない「物」もあれば、想像上どうしても男女の「恋」とは結びつけにくい「物」もある。例えば、耳搔き、歯ブラシ、ハサミ、分銅、引き臼、ふいごなどがそれである。

3. 掛枝児における「物」と「恋」の関係

(1) 「物」を「恋人」に喩えて詠じる

鏡

鏡子兒。你忒煞恩情浅。我愛你清光滿體態兒圓。那一日不與你相親面。我悶你也悶。我歡你也歡。轉眼見他人也。你又是一樣臉。

鏡

鏡さん、あなたはあまりにも薄情者。あなたの清らかな光と丸い姿が好きで、わたしは毎日あなたと顔を会わせる。わたしが落ち込めばあなたも落ち込み、わたしが喜べばあなたも喜ぶ。しかし、他人を見ると、あなたはまた別の顔。

鏡を詠じた掛枝児であるが、ただ単に鏡そのものを詠じたものではなく、鏡を擬人化し、鏡を「恋人」に喩えて詠じたものである。

まず、「清光満」というのは、「清らかな光が満ちる」という意味で、光を反射してキラキラ光る鏡面を指すのであろうが、「清光」という言葉は、「清らかな明るい光」を指すほかに、「人間の素晴らしい風采」を指す場合もある。だから、これは、鏡に反射される光を、「恋人」の素晴らしい風采に喩えた表現である。次に、「體態兒圓」というのは、「体つきが丸い」という意味で、鏡の丸い形を、「恋人」の体つきに喩えた表現である。「那一日不與你相親面」というのは、人間が毎日鏡に顔を映すことを、「わたし」が毎日恋人に会うことに喩えた表現である。鏡は、映されるものを、「忠実に」そのまま映し出す。だから、「わたしが落ち込めばあなたも落ち込み、わたしが喜べばあなたも喜ぶ」。「わたし」と恋人が喜怒哀楽を共にすることに喩える。しかし、鏡は、違う人が顔を映せば、またその人の顔を映し出す。だから、「薄情者」である。「忒煞」は、現代語の「很、太」と同じで、「非常に、あまりにも」などの意味になる。

鏡の外見・用途・性質などを利用して、鏡を「恋人」に喩えている。

鏡を「恋人」に喩える掛枝児を、もう一首見ることにしよう。

鏡

結私情。好似青銅鏡。待把你磨得好。又恐去照別人。你

團圓不管人孤另。知人只知面。知面不知心。當面兒的分明也。你背後昏得緊。

鏡

恋は、まるで青銅鏡のようだわ。あなたをきれいに磨いたならば、他人を映さないかと心配だわ。あなたは自分さえ丸けりゃ、人の孤独なんか気にしない。人を知ると言っても、顔しか知らず。顔を知ると言っても、心は知らず。面と向かっては、はっきりしていても、裏ではまったくのいいかげん。

ガラスの鏡が中国で一般に使用されるようになったのは、清末民初であるから、当時の鏡は青銅鏡のほずである。青銅鏡（「銅鏡」とも言う）は、青銅の一面を平滑に磨いて像が映るようにしたものであるが、普通、背面には装飾として様々な文様を入れる。明代の青銅鏡は、作りが粗く、背面には雲龍紋、双龍紋、双鱼紋などの模様が入っていた⁽⁷⁾。

上の一首とはまた違う角度から鏡を観察している。上の一首は、鏡が映す物をそのまま映し出すという特徴をつかんで、それを恋人に喩えているが、この一首は、青銅鏡は常に磨かなければならないということ、鏡は物の表面を映すことはできても中身を映すことはできないということ、鏡面ははっきりしていても鏡背はそうでないという特徴などをつかんで、恋人に喩えている。

なお、「團圓」は、「円満、仲むつまじい」の意味であるが、青銅鏡の丸い形を指す。勿論、全ての青銅鏡が丸い形をしていたわけではない。唐代からは、方形、菱花形、八棱形などの青銅鏡も現れたが、ここでは恋人との「團圓」に喩えるために、丸い青銅鏡を用いている。

火爆

火爆兒。好似我劣冤家的結構。假星星。你本是一個網糊頭。臉皮兒弄得千層厚。有時動了火。半刻也不停留。爲你受怕擔驚也。不由人不撒手。

爆竹

爆竹は、まるでわたしのあの憎たらしい人みたい。もっともらしく装っていても、あなたはただの紙張り物。面の皮は千層もあるぐらい厚い。時々火がつくと、一刻も止まらない。あなたにびくびくしているわたし、手を離さずにはおられない。

爆竹を恋人に喩えて詠じた掛枝児である。

“冤家”は、もともと「敵、仇」を指す言葉であるが、民歌においては、「愛する人、いとしい人」の意で用いる。“假星星”は“假惺惺”を掛けた表現であるが、“假惺惺”は「もっともらしく装う」という意味で、偽ることを指す。

“惺”の代わりに、わざと“星”を使っているのは、爆竹が火花（“火星”）と関係あるからであろう。“網糊頭”は、「のりで網を頭に張り付ける」という意味であるが、紙をのりで張り付けた爆竹の構造を、当時の男たちの髪を頭巾（“網巾”）でまとめてその上に帽子をかぶる習慣に喩えている。

爆竹は、紙を一枚一枚重ね貼って作る。だから、「面の皮」が“千層”もあるぐらい厚い。中国語において、「臉皮厚」という表現は、日本語と同様に、「厚顔、あつかましい」という意味である。だから、これは爆竹の構造を恋人のあつかましさに喩えた表現である。“動火”という言葉は、「火をつける、火を使う」という意味もあるが、白話の中では「怒る、欲情を起こす」という意味もある。爆竹に火がつくことを、恋人が怒り出すこともしくは恋人が欲情を起こすことに喩える。

爆竹は、火がつくと爆発するから、手を離さなければならぬ。これと同じく、怒りっぽい恋人或は欲情を起こすと一刻も我慢できない恋人にびくびくする「わたし」も、逃げるしかないのである。

このように、「物」を「恋人」に喩えて詠じる掛枝児には、他にも「扇子」、「櫛」、「象牙櫛」、「耳搔き」、「しびん」、「針」、「ハサミ」、「枕」、「纏足布」、「香炉」、「香筒」、「凧」、「風船」、「ろうそく」、「雪獅子」などがあるが、詠物掛枝児の中には、この種の掛枝児が一番多い。つまり、日常生活の中のいろいろな具体的な「物」を、恋人に喩えて詠じるのである。

(2) 自分自身を「物」に喩えて詠じる

簫

奴好似玉簫兒受儘千般氣。想當初你與我聲口兒相依。誰知你放手輕拋棄。音響兒不見你。那一節不是虛。自笑我有眼無心也。顛倒挂着你。

簫

わたしは、まるで簫のふえのようにいじめられる。思えば、あの頃、あなたとわたし、ぴったりと息が合っていたわ。まさかあなたがそんなに簡単にわたしを見捨てるとは。音を出しても、あなたがいなけりゃ、虚ろな音節ばかり。自分でも笑う。わたし、目はあるけど心がないのね。逆さまになっても、あなたのこと思っているから。

女の口調で、自分自身を簫に喩えて詠じた掛枝児である。

簫は、吹くものだから“受氣”であるが、“受氣”という中国語は「いじめられる」という意味である。だから、“受儘千般氣”というのは、文字面では「たくさん氣を受ける」という意味になるが、実は恋人にさんざんいじめら

れることをいう。「玉簫」は、簫の美称である。“聲口兒相依”というのは、簫を吹く人間の口と簫から出る音がぴったり合うという意味であろうが、実は「わたし」と恋人が気が合うこと、つまり愛し合うことを指す。“放手輕拋棄”というのは、軽々しく簫を手から放すことを指すが、恋人が「わたし」を見捨てることに喩える。“音響兒不見你。那一節不是虛。”というのは、いくらいい簫でも、上手に吹いてくれる人がいなければ、虚しい音しか出ないという意味で、恋人に見捨てられた「わたし」の虚しい気持ちを表現したものである。

簫の壁には幾つかの穴が開いている。その穴によって快い音が出るのである。だから“有眼”である。しかも簫は空心である。だから、“無心”である。“有眼無心”という言葉は、“有眼無珠”という成語を真似て作ったものだと思われる。“顛倒挂着你”というのは、「逆さまになっても、あなたのことを思う」という意味で、簫を逆さまにして壁に掛けておくことを指す。しかし、この“掛”には、“牽挂、惦挂”（心配する、気に掛ける）の意味もあり、従って、恋人に見捨てられても、彼のことが忘れられない「わたし」の「痴情」を表現したものである。

竹夫人

竹夫人原係從涼婦。骨格清。玲瓏巧。我是有節湘奴。幸終宵揜抱着同眠同臥。只爲西風生嫉妒。因此冷落把奴疏。別戀了心犯的湯婆也。教我塵埋受半載的苦。

竹夫人

竹夫人はもともと涼しさを作る女。清々しくて可愛いわたしは節ある湘の女。一晩中あなたと抱き合って眠れると喜んでいたら、西風にやきもち妬かれ、あなたはわたしをなおざりにする。あなたは心暖かい湯婆に心がなびき、半年もわたしを埃の中に埋もれさせる。

竹夫人は、古くから漢民族の間で広く使われていた消暑用具である。夏の暑い時期に涼しく寝られるため、寝台に置いて、腕や足をのせたり、抱いて寝たりする竹製寝具である。竹の皮で細長く編んだかごのようなのもあれば、毛竹（孟宗竹）の一段落をそのまま切り取り、中を通し、その壁に穴をたくさん開けて風通りがいいようにしたものもある。暑い夏に、夫人の代わりに抱いて寝る竹製の夫人ということで、「竹夫人」という名前がついたと思われるが、「竹幾」、「竹奴」、「青奴」とも言う。「竹夫人」と呼ばれるようになったのは、宋代になってからである。唐代には、「竹夾膝」と呼んでいた。

竹夫人は、涼しさをもたらす「夫人」だから、“從涼婦”である。“從涼”は“從良”を掛けているが、“從良”は、娼妓が落籍されて結婚することを指す言葉である。だから

これは、竹夫人を、落籍されて結婚した元妓女に喩えて詠じた掛枝児である。

竹夫人は竹製だから、“骨格清”（体つきが清々しい）である。しかも、小柄で可愛い形をしているから、“玲瓏巧”（愛くるしい）である。女の清々しい体つきと可愛い姿に喩えた表現である。

“湘”は、湖南省の別称である。「節ある湘の女」というのは、「湘竹」を指すが、湘竹は、湘江のほとり（特に湖南省と広西省）に産する竹の一種である。表面にまだらの模様があるため、「斑竹」、「紋竹」とも言うが、湘竹については、一つの伝説が伝わっている。舜帝が奉じた時、湘夫人と呼ばれる娥皇と女英二妃が舜の墓のある九嶷山に行き、竹にすがって哭したら、その涙が竹に注ぎ、幹に斑痕が生じて、湘竹になったと言われている。二妃はともに湘江に身を投げ、殉情した。だから、「湘竹」は「節操ある女」の象徴であり、竹の“節”で、女の「節操」を掛ける。

“從良”の身だから、もうこれからは、ずっと愛する人と抱き合って眠れると喜んでいたら、西風が吹きはじめ、天気が寒くなって、竹夫人は必要なくなり、なおざりにされる。“西風”は、秋風を指すが、「わたし」の幸せをねたむ人間もしくは社会を喩える。「塵」は、「ちり」と「浮き世」を掛ける。落籍されても、決して幸せにはなれない元妓女の悲しい運命を喩えたものである。

天気が寒くなると、竹夫人の代わりに“湯婆”（湯たんぼ）が寵愛を受けるようになる。“湯婆”は、中にお湯を入れるから、“心熱”である。情熱的な女或いは心暖かい女の喩えと見ることができよう。もしくは、この掛枝児の後ろに載せている馮夢龍作の掛枝児のように、湯たんぼを正妻の喩えととり、竹夫人を妾の喩えととることもできよう。いずれにせよ、中国封建社会の一夫多妻制度を皮肉的に表現したものである。

このように、「わたし」自身を「物」に喩えて詠じる掛枝児は、他にも「粽」、「傘」、「筆」などがある。

(3)「物」同士を「恋人」同士に喩えて詠じる

石獅子

石獅子。我與你空成一對。我看你。你看我。好不孤凄。我兩人都是石心石意。遠又不多遠。怎能够做一堆。分隔在東西也。空自看上了你。

石獅子

石獅子、わたしとあなたは空しく向きあっている。あなたはわたしを見て、わたしもあなたを見る。とても寂しい。二人とも石心石意なのに、また、遠く離れてもいないのに、一緒になることはできない。東西に分かれて、空しくあなたに見惚れるわたし。

石獅子は、門の両側に飾っておく石の獅子であるが、普通、門の両側の一つずつ置く。だから、「あなた」と「わたし」は「一对」である。しかし、一緒になることはできない。だから、「空しく一对を成している」のである。石獅子は石だから、「石心石意」である。人間の“實心實意”（真心）に掛ける。“實”は“石”と発音が同じである。

一对の「石獅子」を、真心で愛し合っても自由恋愛が認められない当時社会では一緒になることができない恋人同士に喩えて詠じたものである。

纽扣

纽扣兒。湊就的姻緣好。你搭上我。我搭上你。兩下接得堅牢。生成一對相依靠。係定同心結。縮下勿頸交。一會兒分開也。一會兒又挽了。

布ボタン

布ボタンは、とても相性がいい。あなたはわたしにくっつき、わたしもあなたにくっつく。お互いしっかりと抱き合う。生まれつきの一对の持ちつ持たれつ。同心の結をなし、勿頸の交わりを結ぶ。しばらく離れても、再び抱きしめあう。

中国式の布ボタンを、一对の「恋人」に喩えて詠じた掛枝児である。

“搭上”は、「つながる、重なる、くっつく」という意味であるが、白話の中では「男女が私通すること」を指す。だからここでは、布ボタンのボタンと穴の部分を組み合い、閉じられる状態を、男女の私通に喩えている。

“同心結”は、そもそも「堅く解けない結び方、または、その結び方をしたものを」を指すが、そこから派生されて、「男女の愛情の固い絆のたとえ」にも用いられる。ここでは、布ボタンがしっかりと閉じられる状態を、愛の堅い絆が結ばれることに喩える。“勿頸”は、首をはねることを指す。よって、“勿頸交”は、生死を共にするほどの交わりを指す。“縮”は、輪結びにするという意味である。

このように、一对の「物」を「恋人」同士に喩えて詠じる掛枝児は、他にも「蚊帳の釣り手」、「錠と鍵」、「対燭」、「天秤の秤皿」などがある。

(4) 同じ「物」を、「恋人」に喩えて詠じたり、自分自身に喩えて詠じたりする

蠟燭

蠟燭兒。你好似我情人流亮。初相交。只道你是個熱心腸。誰知你被風兒引得心飄蕩。這邊不動火。那里又爭光。不照見我的心中也。暗地里把你想。

ろうそく

ろうそく、あなたはまるでわたしの恋人のように、格好いい。始めの頃は、あなたが熱い心の人だとばかり思っていた。しかし、あなたの心が風に引かれ、揺れ動くようになろうとは。こちらで火をつけなければ、あちらで光を争う。わたしの心を照らしてはくれないが、わたしは闇の中であなたのことを思う。

これは、ろうそくを「恋人」に喩えて詠じた掛枝児である。

まず、ろうそくの表面がツヤがあつてつるつるしていることを、恋人の格好いい外見に喩える。ろうそくは芯に火をつけるから、「熱心腸」である。“心”で“芯”を掛ける。次に、風が当たって、ろうそくの炎が揺れ動くことを、恋人の心が揺れ動くことに喩える。

“動火”は、上でも述べたように、「火をつける、火を使う」という意味もあるが、白話の中では「怒る、欲情を起こす」という意味もある。“火”は「情欲」を指す。“争光”は、文字面では「光を争う」という意味になるが、実は「光栄を求める、面目を施す」の意味である。だから、この部分は、あっちこっちで火をつけるろうそくを、あっちこっちで浮気したり、光栄を求めたりして、気ままに生きる恋人に喩えた表現である。“暗地里”は、文字面では「暗い所で」という意味であるが、「一人で、そっと、ひそかに」という意味もある。ろうそくの火が消えて訪れる“闇”と、恋人に捨てられた女に訪れる“一人ぼっちの寂しさ”を、見事に掛けている。

次に、ろうそくを自分自身に喩える掛枝児を見よう。

蠟燭

奴本是熱心人。常把冤家來照顧。誰教你會風流拋閃了奴。害得我形消影瘦真難過。心灰始信他心冷。淚積方知奴淚多。我為你埋沒了多少風光也。你去暗地里想一想我。

ろうそく

わたしはそもそも熱い心の女。いつもあなたを照らしていた。しかし風流なあなたはわたしを見捨てた。わたしは体が痩せ、影も痩せて、とても辛い。心が灰になってはじめて彼の心が冷たいと信じ、涙が積もってはじめてわたしの涙が多いと分かった。わたしがあなたのためにどれだけの名誉を失ったか、闇の中でわたしのことを考えてみてください。

上でも述べたように、ろうそくは“芯”に火をつけるから、「熱い心」をもったものである。“照顧”は、もともと「世話をする、面倒を見る」の意味であるが、ここでは“照看”の意味で、ろうそくの「照らす」というのはたらきと掛けている。中国語の“風流”には様々な意味があるが、こ

ここでは男女の色事を指す。ろうそくの「体がやせ、影がやせ」というのは、ろうそくが燃え尽きて、形がだんだん小さくなっていくことを指すが、人間の体が痩せることに喩える。

“心”で“芯”を掛けて、ろうそくの芯が燃えて灰になるという意味で、“心灰”と表現しているが、中国語の“心灰”という言葉には「気が落ちる、絶望する、意気消沈」の意味がある。恋人に捨てられた女の絶望に喩える。また、燭淚（蝋のしずく）を人間の涙に喩える。この表現は、中国には古くからあるが、唐の李商隱の「春蠶到死絲方盡，蠟炬成灰淚始乾。（春蚕は死に至ってやっと糸が尽き、蠟炬は灰になって始めて涙が乾く。）」（「無題」）という詩句がとりわけ有名である。

中国語の“風光”という言葉には、「日光、風景」と「体面、名譽」の意味があるが、ここでは、ろうそくの光に、これらのものを掛けて用いている。ろうそくが燃え尽きて消えてしまうと、残るのは“闇”である。上の一首と同じく、“闇”と“一人ぼっち”を掛ける。

- ① ろうそくの「芯」を、人間の「心」に
- ② ろうそくの「照らす」というのはたらきを、人間が「世話をする、面倒を見る」ことに
- ③ ろうそくが燃え尽きて、炎が小さくなることを、「人間が痩せる」ことに
- ④ ろうそくの芯が燃えて灰になることを、人間の「心灰」つまり「絶望」に
- ⑤ 燭淚を、人間の涙に
喩えて、恋人に見捨てられた女の悲しい「恋」を表現している。

(5) 「物」を「恋」そのものに喩えて詠じる

鏡

鏡子兒。一块兒。團圓得妙。沒來由。跌破了。兩下開交。似一钩残月在天邊孤照。待要湊合你又湊不上。待要拋下你又不忍拋。還是尋一個铸鏡人兒也。重新铸一铸好。

鏡

鏡一枚、妙に丸い。わけもなく、転がって、割れてしまった。二つに分かれた欠片は、まるでぼつんと空にかかっている残月のようだわ。くっつけようとしてもくっつかず、捨てるにも忍びない。やはり、鏡を铸る職人にもう一度铸てもらったほうがいいでしょうね。

鏡を詠じた掛枝兒であるが、鏡を、「恋」そのものに喩えている。

まず、“團圓”という言葉で、鏡の丸い形と「円満」の意を掛ける。次に、鏡が割れることを、愛が壊れることに喩える。二つに割れた欠片を、ぼつんと空にかかっている

残月に喩えるが、“残”、“孤”という表現で、一人ぼっちの人間の寂しさと結びつける。割れた鏡の欠片を、くっつけようとしてもくっつかず、捨てるにも忍びないというのは、まさに、一旦壊れてしまうと、元に戻ることは難しく、だからと言って忘れられるかと言えば、それも思うままにはならぬ恋の哲学でも説いているようである。「やはり、鏡を铸る職人にもう一度铸てもらったほうがいいでしょうね」というのは、壊れた「恋」も最初からやり直すしかないということであろう。

「物」を「恋」そのものに喩えて詠じる掛枝兒は、他にも「頭巾」などがある。

以上見てきたように、掛枝兒は日常生活の中のあらゆる具体的な「物」を、「恋人」に喩えたり、自分自身に喩えたり、「恋」そのものに喩えたりして、男女の「恋」と結びつけているが、主に「物」の外見・構造・性質・用途・名前などの特徴をつかんで、男女の「恋」との共通点を見つけ出している。

おわりに

本研究は、掛枝兒を主な研究対象として、明代民歌に現れた「物」と「恋」の関係について考察したものである。見てきたように、掛枝兒の中では、日常生活の中のあらゆる具体的な「物」が人間世界の「恋」と結びつけられている。つまり、日常生活の中のあらゆる具体的な「物」が、人間と同じく「情」を持つものに見なされている。

「情」が人間世界の全てであることを主張し、「情」を極端的に唱えるのは、明代文学の一つの大きい特徴である。湯顯祖の戯曲『牡丹亭』は、その代表とも言えよう。馮夢龍は編著とされる『情史類略』の序において、「天地若無情，不生一切物。一切物無情，不能環相生。生生而不滅，由情不滅故。四大皆空設，惟情不虛設。（天地にもし情なければ、一切の物を生ぜず；一切の物に情なければ、環りて相生する能わず；生々しく滅びざるは、情の滅びざるに由るの故；四大皆な空設たるも、惟だ情のみ虚設ならず」といっている。天地万物を、「情」なしには存在できないものと見ているのである。

合山究氏は、「明清時代における花の文学の諸相」⁽⁸⁾において、次のように述べている。「それは、人間以外のあらゆる異物異類と靈的に交感する一種のアニミズムないしは万物共存の意識と、近代的なエスプリ精神との結合によって生まれたものであり、あらゆるものをどこまでも擬人化し、人間世界になぞえようとするところに特色がある。」

また、明代は手工業が発達して、様々な新しい「物」が続々と現れ、「物」が氾濫した時期である。しかも、商業

が発展して、市民階級が急速に成長し、人々の関心がだんだん現実の日常生活に向けられるようになる。

これらはすべて、掛枝児や山歌のような民歌が「物」と「恋」を結びつける表現形態を形成するに影響を与えたとされる。

補 記

馮夢龍は『童痴一弄・掛枝児』を編集した後、続いて『童痴二弄・山歌』を編集したが、その構成は次のようである。

卷一私情四句	65首	卷二私情四句	65首
卷三私情四句	35首	卷四私情四句	40首
卷五雜歌四句	36首	卷六詠物四句	71首
卷七私情雜體	22首	卷八私情長歌	14首
卷九雜詠長歌	8首	卷十桐城時興歌	24首

卷一、二、三、四は、同じ「私情四句」ではあるが、表現する内容が異なる。だから、山歌の中でも一番多いのは、やはり詠物の歌（卷六詠物四句）であるが、掛枝児と同じく、主に日常生活の中の具体的な「物」を詠物対象とし、ほとんどが男女の「恋」を詠物のテーマとする。その詠物対象となる「物」は、次のようなものである。（下線がついているのは、掛枝児と共通している「物」）

1. 日常生活用品

頭巾の紐、海青（旧時の広袖の服）、うちわ、きんちゃく、珠、耳搔き、吸煙管、毛布、蚊帳、寝靴、香筒、香円（香で作られた丸い形の美容品）、お箸、盃、茶注（お茶を入れる注子）、攪盒（数種の果物や料理を盛る仕切のある器）、算盤、小秤、傘、黒つぼ、つるべ、ろうそく、提灯、走馬燈、しびん、糞箕（糞便や堆肥などを運ぶに使われる竹もっこ）など。

2. 娯楽物

将棋、囲碁、双六、サイコロ、投壺（宴席の場の遊びに使われる壺、壺の中に矢を投げ込んで勝負を争い、敗者に酒を飲ませる）、だるま、風船、蹴羽根、凧、爆竹など。

3. 楽器

太鼓など。

4. 文房具

硯、筆など。

5. 植物

花、水慈姑、梅、白玉木蓮、向日葵の花、茄子など。

6. 食べ物

粽、饅頭、お茶、生麩、（茄子）、（梅）など。

7. 昆虫及び動物

こおろぎ、魚、鼠など。

8. その他

風、珠、流星、船、船の苦、釣り船

注

- (1) 翻訳は、大木康氏の『馮夢龍「山歌」の研究』（東洋文化研究所紀要第105冊、1988年）と『俗曲集「掛枝児」について—馮夢龍「山歌」の研究・補説』（東洋文化研究所紀要第107冊、1988年）を参考にさせて頂いた。
- (2) 馮夢龍『明清民歌時調集』（上海古籍出版社、1987年）、7頁。
- (3) 鹿憶鹿『馮夢龍所撰民歌研究』（学海出版社、1986年）、58頁。
- (4) 馮、前掲書、29頁。
- (5) 大木康氏の前掲『馮夢龍「山歌」の研究』の176頁に、例を挙げている。
- (6) 楊民康『中国民歌与乡土社会』（吉林教育出版社、1992年）、307頁。
- (7) 叶大兵・乌丙安主編『中国風俗辞典』（上海辞書出版社、1990年）、482頁。
- (8) 『文学論輯』第三十号（九州大学教養部、1984年8月）、107頁。